

## 死をどうしたら受けとめられるのか②

おやさと研究所教授  
堀内 みどり Midori Horiuchi

## 別れのとき

人は必ず死ぬことになっていますが、いまだにその死が確かに伝えられたことはありません。そうした不可知の部分を持つ死という現象は私たちにとって必然の体験となるはずであるのに、それを考える時には常に、「不」体験のためにある種の恐さや不安と隣り合わせになりやすいともいえます。

学生時代、岸本英夫氏の『死を見つめる心』（講談社文庫、1973年）が授業で紹介されました。東京大学教授や同附属図書館長を歴任した著名な宗教学者の岸本氏は、アメリカに在住している時、癌が見つかり、余命半年と言われ、摘出手術をします。癌に罹る前も後も、彼は「私には、死とともに、すなわち、肉体の崩壊とともに、『この自分の意識』も消滅するものとしか思えない」（同書、18頁）と思っています。しかしながら、癌の宣告を受け、次のように感じました。

まっくらな大きな暗闇のような死が、その口を大きくあけて迫ってくる前に、私はたっていた。私の心は、生への執着ではりさけるようであった。私は、もし、自分が死後の理想世界を信じることができれば、どれほど楽だろうと思った。生命飢餓状態の苦しみを救うのに、それほど適切な解決方法はない。しかし、（中略）それは、苦しさに負けた妥協にすぎないではないか。（同書、19～20頁）。

つまり、死後の生命の存続を信じない岸本氏は、癌という思いがけない病気のために「生命飢餓状態」におかれ、「死の暗闇」の前に立つことになりました。岸本氏は、死の暗闇は実体ではなく、人間に現実と与えられているのは、今ある生命だけであるから、この現実の生命によって繰り返される日々の生活を大切にしようと思うようになったと書いています。そうして、生命の肯定を出発点とし、死は生命に対する「別れのとき」であるという境地を得ていきました。「よく生きる」こと、そして常に死に処する心構えの用意をすることは、「立派に最期の別れができるように、平生から、心の準備を怠らないように努める」（同書、23頁）ことであると述べています。

こうして、自分が死に直面することによって、私たちは死の問題に否応なく直面していきます。肉体的な痛み、精神や心の痛み、遺された者への対処や気遣い・思い…。岸本氏は10年にわたって癌の再発に向き合い、常に死の問題に直面してきました。そして、

なぜ、死が、人間にとって、大問題になるか。死が、人間にとっての大問題となるのは、生きたいとねがう人間の生存欲をおびやかすからである。死は、人間の、生きたいという心の、向う側に、たちはだかっているのである。（同書、25頁）

という考えに至ります。生きている人間の多くは、死のことをたいていは忘れていて、健康なときには、その「生」について疑うことはあまりありません。自分がどれほど「生きたい」と思っていたのかということも意識されてはいないでしょう。これが意識されるのはまさに「生」がおびやかされている時なのです。それは苦しみとなって私たちを襲ってきまします。岸本氏は、死を「別れのとき」と思えるようになり、「死も、そ

のつもりで心の準備をすれば、耐えられるのではないだろうか」（同書、31頁）ということに気づき、ころがずいぶん落ち着いたということです。

しかし、「別れのとき」という考え方に目ざめてから、私は、死というものを、それから目をそらさないで、面とむかって眺めてみるのが多少できるようになった。（中略）死とは、この世に別れをつげるときと考える場合には、もちろん、この世は存在する。すでに別れをつげた自分が、宇宙の霊にかえって、永遠の休息に入るだけである。私にとっては、すくなくとも、この考え方が、死に対する、大きな転機になっている。（同書、33頁）

こうして、岸本氏は生命飢餓状態に置かれて自分の生死観を構築していきました。彼は「生命飢餓状態におかれた人間が、ワンワナしそうな膝がしらを抑えて、一生懸命に頑張りながら、観念的な生死観に求めるものは何であるか。何か、この直接的なげしい死の脅威の攻勢に対して、抵抗するための力になるようなものがありはしないかということである。それに役立つような考え方や観念の組立ては、すべて、無用の長物である。」（同書、13頁）と言い切っています。そのように、彼が向かった、あるいは生命飢餓状態におかれた人にとっての「死の問題」は、きわめて現実的で深刻なものであります。

## 死について考える—岸本英夫の「生死観四態」

死の問題に古来から多少ともかかわってきたのは、宗教とよばれる分野でした。死んだらどうなるのか。死とは何であるのか。死後の世界はあるのか。あるとすればどのようなものなのか。どのような死に方ができるのか。…これらは、今どのように生きていくべきなのかという問題と密接にかかわりながら説かれることも多くありました。

岸本氏は「生死観四態」（同書、99頁～119頁）の中で、「死が人生の重大関心事となるのは、それが生の終焉であるからである。（中略）人間の生に対する執着、どうしても死なねばならぬという事実、死後の運命の不可知、この三つの事実が激しい激流となって、互いに相打ち、相噛み合って、大きな渦巻をつくる。その渦巻から立ち昇る水煙りの如く、さまざまな生死観が湧き上がって来る」（同書、100頁）けれど、そのような「多様な生死観を通観すると、限りなき生命、滅びざる生命の把握の仕方について、いくつかの類型に概括することができるように思われる」（同書、101頁）として、以下の4態を挙げています。

1. 肉体的生命の存続を希求するもの
2. 死後における生命の永存を信ずるもの
3. 自己の生命を、それに代る限りなき生命に托するもの
4. 現実の生活の中に永遠の生命を感得するもの

1は、「死にたくない」という思いの最も素朴な表れで、「当面の死の克服と、暫定的な肉体的生命の存続」（同書、102頁）とが問題になるといいます。2. 3. 4. は、肉体の死だけで、人間の死を終わりにしないという点で共通するかもしれません。次回で紹介したいと思います。